

企業戦士アクシズZZ

放置アフロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

宇宙世紀のあの人たちがバブルの日本にやってきました。

登場人物

アクシズ建設社長 菅 浜子（かん・はまこ）

「このアクシズ建設、みくびつては困る！」

同営業課ヒラ社員 真島 世路（ましま・せろ）

「浜子社長・・・ああ、浜子社長・・・浜子社長おお！」（意味不明）

同営業課ヒラ社員 都外川 暮巳（ととがわ・くれみ）

「私には、内から湧き上がる（仕事に対する）衝動はあるまい！」（いや働けよ）

同営業課長 後藤 豪（ごとう・ごう）

「高所現場なんて怖くなあーい！ 怖いのは格下げだけだあ!!」

同総務課長兼秘書 入谷 はこべ（いりや・はこべ）

「チツ、（出張に）出て行った時の勢い、あれは見せかけだったのか」（空出張の疑い）

同厚生課ヒラ社員 五十川やよい（いかがわ・やよい）

「お前たちも私をヒラつてバカにするのか！絶対に私は（宴会）部長になる！」

同外注清掃業者 木矢良 すみれ（きやら・すみれ）

「いつまでもものんきに洗濯女やつてる訳にはいかなんだよ！」（窓拭きもあるので）

来栖三姉妹長女 来栖 風（くるす・ふう）

「プ（ry）」

同次女 来栖 風美（くるす・ふうみ）

「（姉は）赤子も同然だね」

同末妹 来栖 麻里（くるす・まり）

「アイス……、私を幸せにしてくれるアイス、誰にも奪わせはしない！」

同養父&ジンネハイツ大家 神根（じんね）

「最後の命令だ……。タバコ買ってこい。アイスも……。許す」

所轄警ら部警察官 田草警部補（たぐさ・けいぶほ）

「遊んでいるつもりか、貴様！マル被（犯人）は落とせるときに落とせ！」（取調べで）

佐備建設専務 九部 真（くべ・まこと）

「私は信じんよ……地価の暴落なぞ……」

# 目次

第一章 アクシズがやって来るヤア!

ヤア!ヤア!

1 マシユマー・ゼロ | 1

2 ハマーン・カーン | 18

3 プルトウエルブ | 35

第二章 ちよつと一年戦争行ってくる!

4 地球降下作戦(前編) | 62

5 地球降下作戦(後編) | 78

6 ジンネマン(前編) | 98

7 ジンネマン(後編) | 118

8 ガルマ・ザビ(前編) | 135

9 ガルマ・ザビ(中編) | 149

10 ガルマ・ザビ(後編) | 160

11 ヤヨイ出撃(前編) | 174

12 ヤヨイ出撃(中編) | 196

13 ヤヨイ出撃(後編) | 209

14 アムロ脱走? | 224

15 トリプルズ+α | 243

16 死闘は憎しみ深く(前編) | 257

17 死闘は憎しみ深く(後編) | 271

第三章 仁義なき戦い オデッサ激闘篇

18 オデッサ(1) | 289

19 オデッサ(2) | 305

29	28	小隊	27	26	25	24	23	22	21	20
凋落のアクシズ	崩壊	第四章	オデッサ(10)	オデッサ(9)	オデッサ(8)	オデッサ(7)	オデッサ(6)	オデッサ(5)	オデッサ(4)	オデッサ(3)
		本当は怖い第08C.D.								
458	437	A.	423	409	397	383	365	347	333	320

# 第一章 アクシズがやって来るヤア！ヤア！ヤア！

## 1 マシユマー・ゼロ

第一次ネオ・ジオンの最中、勃発した内乱。

反乱の首領・青年士官グレミー・トト。そして、ジオン復活を掲げるザビ家の摂政・ハマーン・カーン。ネオ・ジオンはグレミー派、ハマーン派に分かれ、同族殺しという、血で血を洗う潰し合いを演じていた。

UC・0089、1月13日。コア3沖会戦。

《クイン・マンサ》の全天周モニターに映る真つ黒な宇宙。

闇の中から、それは湧き上がるようにグレミー軍パイロット・プルツーに迫る。敏感に『それ』を感じ取った彼女のニュータイプ能力は、額に鋭い痛みとして現れる。

「うっ、なんだ？なんてプレッシャーだ」

その強大さにヘルメット前部を思わず手で抑える。

「どこから、……あれか！」

視線を走らせるプルツーは、モニターに発光群を認める。それは、まだ小さく針の先のようにしか、映しだされていないが、明らかに接近するハマーン軍MS編隊が漏らす

スラスト光であった。

先頭は緑のモビルスーツ。かつてのジオン公国の主力機であり、象徴と言っても良いMS-106を彷彿とさせるシルエットの《ザクⅢ改》。

その指揮官機に続く、マツシブなどム系MSの《ドライセン》、高機動型可変MA《ジャムル・フィン》、そしてミサイル・ポッドを多数装備した中距離支援MS《ズサ》。合計9機、混成3個MS・MA小隊が《クイン・マンサ》に攻撃体勢で迫っていた。

《ザクⅢ改》のコクピット、リニア・シートに収まるマシユマー・セロは素早く部隊に指示を送る。

「《ズサ》隊は後方よりミサイル発射後、《ジャムル・フィン》と連携して敵ニュータイプ部隊を攪乱せよ。《ドライセン》隊は挟撃、接近戦で仕留めろ。

私は《クイン・マンサ》をやる!!」

彼の命令に部下達は間髪を入れず、従い散開した。

モニターに映る《クイン・マンサ》の頭頂高40m近い巨体。ずんぐりむつくりと表現してよいシルエット。しかし、その見た目は裏腹に俊敏な機動性と、戦艦クラスの火力を誇る。現存するMSの中で最強と言うにふさわしい機体であった。

その《クイン・マンサ》に、単機マシユマーは特攻を敢行する。

「キャラ・スーンか? いや、違う! マシユマーだな!」

確信するプルツーには、音を遮断する真空を突き破って、『ザクⅢ改』に搭乗して  
であろうマシユマー・セロの高笑いが見こえたような気がした。

「よくもまあ、のこのこと！恐れる心がないのかいっ？」

プルツーは蒼い瞳を左右に走らせる。戦闘機動を予測しながら、『ソラ飛ぶビーム砲  
台』のファンネルを背部バインダーから射出する。

全装備数の3分の1、10基ものファンネルが『ザクⅢ改』に殺到し、空間を球形に  
取り囲む。

「うふふふ、・・・マシユマー、観念しなっ！」

プルツーの殺意が『クイン・マンサ』のサイコミュ・システムにより拡大され、ファ  
ンネルに伝えられる。受け取ったファンネルはそれをビームという形で敵MSを焼き、  
貫こうとする。

しかし、マシユマーも人の殺意を読み取る特殊能力、NT能力でプルツーとファンネ  
ルの攻撃を先読みしていた。亜光速で発せられるイエローの光軸をジグザグにかわす。  
いやそれどころか、『ザクⅢ改』の右マニピュレータにビームサーベルの光刃を形成する  
と、返す刀で1基のファンネルを切り墜とした。

接近を危険と判断し、距離を取るファンネルは、左右フロントスカートから発射され  
るビームキャノンが追撃する。さらに、2基のファンネルが墜とされた。

「サイコミユも搭載してないのに、なんで・・・」

鬼神のごとき戦いぶりに、ヘルメットの内、プルツの顔に焦りが浮かぶ。さらに、《クイン・マンサ》に肉薄する《ザクⅢ改》。

「させないつ、ファンネル！」

プルツの命令に1基のファンネルが《ザクⅢ改》の進路に立ち塞がり、牽制のビームを放つ。しかし、マシュマーは最小限のロールでかわすと、逆にそのファンネルは振り下ろされた光刃に前の3基と同じ運命を辿った。

「もらったあああ!!」

マシュマーの叫びがコクピットに木霊する。

苦し紛れに発せられた《クイン・マンサ》の胸部・腕部の拡散メガ粒子砲をかいくぐり、《ザクⅢ改》は再度ビームサーベルを振り下ろす。

ぎりぎりでかわした超高温の光刃が《クインマンサ》をかすめる。その放射熱が装甲を焦がしていった。

「い、こいつ・・・並ではない！」

呻くプルツは反撃のため、《クインマンサ》の右マニピュレータにサーベルを形成し、一太刀浴びせるが、軽々と返され、それ以上の格闘戦を演じるまでもなく、後退する。追撃のビーム攻撃を受けなかったのは、浮遊岩石を盾にできたため、幸運と言え

る。

「あんな、大したことない《ザク》もどきに、．．．なんて奴、．．．」

歯噛みするが、プルツーは一旦、アクシズへ撤退する意志を固めた。

「ふふ、追ってこい、マシユマー。ニュータイプ部隊が待ち伏せしているとも知らずに．．．」

彼女は半数のニュータイプ部隊をアクシズに温存させていた。

コクピットの内では、プルツーは10歳の少女とは思えぬ、残忍な嘲笑を浮かべた。

「このまま一気に攻め込むか．．．?」

《ザクⅢ改》の全天周モニター正面には、石ころと表現するには、巨大過ぎるアクシズの姿が映し出されていた。まさに、岩石状移動要塞というにふさわしい。

《クイン・マンサ》はまさにその要塞に潜り込もうとしている。小さく映るスラストー光は岩陰に隠れようとしていた。

「いや．．．。グレミーもまだ全軍を出していない。退いたと見せかけ、戦力を引きずり出すのが、上策か．．．?」

逡巡しながら、マシユマーは胸にさした一輪のバラを口で啜える。これは彼が盲信する主、ハマーン・カーンから授けられたものだ。

「むっー！」

新たに起きた殺意にマシュマーが反応する。彼方の戦鬪の閃光を見た彼は、その方角から接近する2機の敵機、《ドーベン・ウルフ》を認める。

一瞬、マシュマーはそれに注意を引きつけられた。

次の瞬間、直上から急降下したもう1機が、サーベルを《ザクⅢ改》の頭部に叩き込もうとする。

機体をスピンさせ、すんでのところかわすが、反撃のビームキャノンの後手に回つた。

あつさりと回避されると、最初に発見した2機がいつの間にか、下方から回りこみ、《ザクⅢ改》の近傍を擦過する。そして、両機が交錯する瞬間に、有線アームで《ザクⅢ改》の両腕を掴み、拘束する。さらに、別の2機が両脚も同様に拘束する。

有線アームによって、大きく四肢を広げられた《ザクⅢ改》の姿勢は宇宙に磔に処されているように見えた。

「引つかかったな、マシュマー！」

隊の指揮官、ラカン・ダカランがやはり愛機の《ドーベン・ウルフ》と共に、浮遊岩石の影から現れる。

《ドーベン・ウルフ》は有線アームを通して、《ザクⅢ改》に高圧電流攻撃を仕掛ける。

これは、パイロットに対する攻撃でなく、MSに搭載されたコンピュータなど電子部品をショートさせ、使用不能にさせようというものである。

操縦桿を握る手にも感じられる通電の痺れる感覚。しかし、マシユマーは意に介さず、

「子供だましがあああ！」

むしろ、精神的高揚、気合とも呼ばれるそれが、マシユマーの戦意を極限まで高める。「心配するな。ひと思いに楽しんでやる。やれっ!!」

ラカンの合図と共に、撃ち込まれる四条の光軸、ビームライフル。

しかし、

「てああああああ!!」

裂帛の気合。

《ザクⅢ改》からにじみ出た緑の光が撃ち込まれた、《ドーベン・ウルフ》の光軸をすべて跳ね返した。

「な、何をしたのだっ？マシユマー!!」

【アクシズの世紀末拳王】、【最後の武人】と評されるラカンほどの男が狼狽する。

「ハッハッハッハ!!」

マシユマーは常軌を逸した哄笑をしつつ、《ザクⅢ改》のマニピュレータを振り、有線

アームごと一機の《ドーベン・ウルフ》を手繰り寄せる。パイロットが有線を切断して、逃れようとしたときには遅く、《ドーベン・ウルフ》は蜘蛛の巣に絡みとられた青い蝶のごとく、身動きが取れなくなった。

緑のマニピュレータがその頭部を捻じ切る。

「私はやられぬぞ……。このマシュマー・セロ、己の肉が骨から削ぎとれるまで戦う！」  
「り、離脱しろ！早く、……」

それが無駄と分かっているながら、ラカンは拘束された《ドーベン・ウルフ》に通信を送る。

後年のサイコフィールドの光。それをサイコフレームどころか、簡易サイコミユすら搭載しない《ザクⅢ改》が発している。

「ハマーン様……、バンザアアアイ!!」

目前に新たな太陽が現出したかと思われるような閃光が迸る。

「な、何の光……。!?」

すべてを噴き飛ばす衝撃波が虚空に木魂した。

西暦1989年1月13日金曜日。日本。東京のとある建設会社。

「ばんぎあああい!!」

叫びつつ、背広に通した両腕を高々と頭上に挙げる。そして、安っぽい事務椅子に座ったまま後方へ盛大に倒れこんだ。

ごっ！

床に後頭部を強打した背広姿の男、真島ましまはごろごろ、と転がり悶絶する。

「せ、先輩、……何やってるんですか?!」

慌てて、隣の都戸川とがわが助け起こす。事務机に向かい合わせの真島の先輩、後藤は驚いた様子で腰を浮かす。

少し離れた窓際に座る若い女社長の浜子も目を丸くしていた。

しかし、彼女の横、秘書然と立つミニスカートの入谷いりやはこべだけは、真島を一瞥するや、「ちっー」と鋭く舌打ちを漏らし、視線を逸らした。その態度すべてが、『ドジ。使えない奴』と物語っていた。

「おいおい、真島。新年早々、おめでたい気持ちを引きずっているのは、分からんでもないが。」

万歳は不謹慎だろ、常識的に考えて」

転がったまま見上げると、机の向こうで後藤が太い眉毛を『ハ』の字にして、苦笑していた。

(※この年、1月7日、昭和天皇が崩御され、国内は前年から自粛ムードに包まれていた)

後頭部を手でかきつつ、椅子に掛け直す真島だが、どうも

(なーんか、しつくりこないなあ……。今日は早めに……。)

定時退社時刻の5時30分になると、仕事を切り上げた。

「真島世路、お先に失礼します。お疲れさまでしたー」

東京郊外、私鉄沿線のベッドタウン。

アパートに帰ると、すぐにシャワーを浴び、通りに面した窓を開け放つ。1月の冷氣を含んだ風が真島の肌をなめる。

(いい風だ。火照った身体に心地よい)

ぼんやりしながら、真島はくわえたショートホープに火を点ける。2階から眼下を見やると、ちょうど大家である神根じんねの3Lサイズの特大皮ジャン姿が目飛び込んできた。

後ろに子犬のようにくつついて歩くのは自慢の愛娘の三つ子だろう。今年の4月には晴れて高校生と聞いている。

「ばんわー。神根さん、お出かけ?」

紫煙を吐きながら、声をかける。

鳥の巣のように、もしやもしやの伸び放題にした栗毛の娘、ーこれは末っ子の

来栖麻里だーがうれしそうに手を振る。その隣、横髪を肩まで伸ばしたショートボブの栗毛の娘、ーこれは次女の来栖風美ーは「フフン！」という感じのこまつしやくれた笑みを送る。

父親の神根と娘たちの姓が異なるのは、複雑な家庭環境に起因するが、今回の話には関係ないので、割愛する。

父親の代わりに、次女・風美が真島に答える。

「牛丸。いいだろ？」

「いいねえ。俺、肉なんか今週、食ってねえよ」

有名焼肉チェーン店の名を聞き、カラカラ、と真島が笑い声を上げると、

「お前も来るか？たまにはおごってやるぞ」

神根がそのもじやもじやの髭面から、ふさわしい野太い声をかける。

「マジっすか？行きます！今、行きます」

40秒で支度した真島がジャージにサンダルを突っかけて、階下の3人の元へ走った。

「寒くないんですか？」

真島の軽装を気遣うのは、紺のダツフルコートを着込んだ麻里だ。

「若いから平気。ていうか、俺のことより、麻里ちゃんも女の子なんだからさあ。髪型ぐ

らしい気にしようぜえ。なにこの鳥の巣みたいの？お姉ちゃんみたいになよ」

言いつつ、真島は185cmの長身を生かして麻里の栗毛に手をやり、くしゃくしゃとする。

「わー!!やめてくださいいよお。余計おかしくなるう・・・」

「今でも十分おかしいつつうの」

両手で抵抗する麻里だが、お構いなく散々、その栗毛をかき混ぜると、「おーい、置いてくぞー」という神根の声を受け、ようやく真島はその広い背を小走りに追った。

「お熱いねー、お二人さん」

「妬いてるのかい？」

「や、やめてよー姉さん!!」

風美のからかいを真島はさらつ、と受け流すが、麻里は顔面から火が出るのではないかと赤く染める。

しばらく歩みつつ、風美が呆れたように口を開く。

「しかし、・・・よくまあ、のこのこと・・・お父のおおとうごりつて言われた途端に来るのかい？」

なぜか聞いたことがあるようなそのセリフ。

一瞬、ヒヤツと心臓を捕まれたような錯覚を覚える真島だが、気を取り直して、

「いやー、風美ちゃん、今日もかわいいねえ」

と猫撫で声で少女のご機嫌を取ろうとする。

「ノーテンキだねー」

一転、風美は両手を頭の後ろで組んだ。タイトジーンズに包まれた年頃よりも長い美脚を真つ直ぐ蹴りだし、すました表情を見せる。

「あれ？　そういえば、ふう風ちゃんは……？」

思い出したように、真島は三つ子の長女の名を挙げた。すると、麻里は小さな眉根にシワを寄せ困ったような表情を浮かべ、風美は嫌いな食べ物でも出されたような顔をした。

父親の神根は口を『へ』の字にして、

「あいつはキャンプだ」

苦々しい口調で言う。

「え……!?　またつすか!?　最近、多いつすね……」

真島は理解した。『キャンプ』と言うのは、彼ら神根・来栖一家で『家出』という隠語だった。

「今度は何やったの？」

「あいつ、妹の……、麻里の大事に取っておいたアイスを勝手に食べちゃったんだよ」

「そ、そんなことで……。あ、ごめんね、麻里ちゃん」

真島の言葉に麻里は、しゅん、と少し傷付いたような顔をしてうつむいた。

『そんなこと』なんだけどね。あいつ……。(アイスを)あげるよ、気にしないって言った麻里にさ、『知ってる。麻里の物はあたしの物だから』って、当然だつて言つたんだよね」

(ど、どこのガキ大将だよ……。)

真島は呻く。

麻里は心優しい末っ子だったが、悔しかつたわけではない。ただ、人のアイスを食べておいて、コタツで横になり、平然とその腹をさすつている姉の姿を見て、哀しくなつた。不覚にもその時、麻里の頬を一筋の涙がこぼれてしまった。

そして、たまたまその様子を見かけた風美がキレた。

「麻里に謝れ、つて言つただけどね。あいつ、全然、反省してないんだよね。で、喧嘩」相手の平手打ちを先読みするという、『例のあの能力』を駆使した壮絶な姉妹喧嘩が繰り広げられる真つ只中に、神根が仕事から帰宅した。

当然、三姉妹から事情を聞いたわけだが、

「姉に手を挙げる風美を厳しく見ても、あいつが悪い。俺も当然、麻里に謝るように言つたんだが、……。」

神根の髭面が苦々しいもの変わる。

「『誰も私を甘やかしてくれないんだー』とか言つて出て行っちゃった。あいつ、最近ほんとに頭、おかしい」

「こら。姉さんのことをそんな風に悪く言うんじゃない」

と神根がたしなめるが、伸ばした横髪に指を絡ませながら、「はいはい」と答える風美は全く意に介してない様子だ。

「でも、・・・風姉さん、このところ様子おかしいよね。去年の秋ぐらいからかな？」

麻里は心配そうな口調と表情である。

「ああ。確かその頃だよ、教室で倒れたの」

「倒れた!? 父さん、そんな話聞いてないぞ!!」

風美の言葉を受け、神根は驚きで歩みを止め、その場に巨体を屹立たせた。立ち上がった熊のようである。

「倒れた、つて言つたつて授業中に居眠りして椅子から転げ落ちたんだよ」

神根は「なんだ、そんなことか・・・」と心配して損したような顔つきになり、また歩き出す。

「私は見えないんだけど、・・・」

と、前置きをしながら、風美が聞いたところによると、

「『あたしよ、死ねー！』とか叫びながら、コケたもんだからクラス中で大ウケ。爆笑で授業にならなかつたって、理奈が言ってたよ」

先ほどの風美の『よくもまあこのこと、・・・』のセリフに続き、何やら身に覚えのありそうなことに、真島は背筋が若干寒くなつた。

(いかん、いかん！早く店に行こう。湯冷めする)

その後、4人は仲良く鉄板を囲むこととなつた。

神根は「ガハハ!!」と豪快に笑いながらマツコリをあおり、真島も生ビール大ジョッキを、ぐい、と傾け、「アツハツハツハ!!」と哄笑する。

そんな大人を無視して、風美は

「この程度の量、赤子も同然だねっ!」

などと白飯とカルビにがつつき、麻里も食後のレモンアイスを一口シャクって、

「生きててよかつた・・・」

などと悦に入っている。

そして、焼肉店・牛丸の近くの喫茶・富士では。

閉店間際に入店した栗毛の少女が、いちごパフェとチョコレートパフェを同時注文し、恐ろしい勢いで咀嚼していた。

そして、食べ終わるや、

「プルプルプルプルー〜♪」

と、意味不明の奇声を上げながら、駆け足で退店していった。ドアベルの、カランコロン、という乾いた金属音が消える頃になって、ようやく店主は気がついた。

「はっ!!あのク○ガキ……。食い逃げしやがった……。」

西暦の日本。バブル景気に浮かれるこの時代は、マシユマー・ゼロ真島世路、ジンネマン神根、そして、トリブルズ来栖三姉妹にとつて平和であった。

しかし、その平和が徐々に変わっていきこうとは、彼らには予想もできないことであった。

## 2 ハマーン・カーン

西暦、日本。

異変は翌週も起こっていた。

1989年1月16日月曜日。

「わー！君にやられるー!」

叫びつつ、先週の真島マシユマー・セロ世路同様、隣の都外川ととがわ・くれみ暮巳は椅子からひっくり返った。職場で居眠りしていたらしい。

「何やってんだ？真島のバカが伝染ったか？」

向かいの事務机から立ち上がり、暮巳を見下ろす四角い顔と太い眉毛が洗面を作っていた。先輩社員の後藤だ。

暮巳を助け起こそうとしていた真島は一転、後藤に向き直り、「そりやないでしょう」と情けない顔を作る。

代わりに、暮巳に手を差し伸べたのは、通りがかった若い女性社長、浜子であった。

「大丈夫、暮巳君？昨日、お酒でも飲みすぎたの？」

ボブ、というより昭和臭全開のおかつぱ髪。20代で上り詰めたトップという立場

上、行き遅れてしまったハイミス（死語）。

しかし、かわいい。

猫っぽい癒し系の笑みから、『はまこ』をもじって『はにやこ』なんて愛称も付けられている。

その微笑を浮かべ、倒れた暮巳の手を取った浜子は、引き起こそうとした。

「あら・・・??」

しかし、彼女の体重は軽く、力も足りなかった。逆に、暮巳の方へ倒れこんでしまった。

柔らそうな薄桃色の頬が迫る。浜子の髪は暮巳の顔に掛かり、ストッキングに被われた彼女の膝が彼の股間に当てられる。

それを見た、真島は、

「じゃ、社長!?! . . . 都外川暮巳いい、覚悟おお!!」  
キレた。

そして、その異変はとうとう、社長である菅浜子かん・はまこにまで訪れた。

翌日の午後。その予兆とも言うべき現象が起きる。

昼食を外で済まし、会社へ戻った真島は入り口のロビーで奇妙なものを見た。

清掃業者で出入りしている、木矢良きやらすみれが掃除機をかけた状態で、ロビーの柱に頭



(いきなり、人であることを否定されてもなあ……。プロゴルファー猿かよ)

テレビアニメの主人公の名言(迷言?) 『わいは猿や』を思い出す真島であった。

UC・0089、1月17日。サイド3のコロニー・コア3とアクシズの居住地区だった小惑星モウサが激突したその時の中。

ネオ・ジオン摂政、ハマーン・カーンと《ZZガンダム》パイロット、ジユドー・アーシタは戦っていた。

無重力、真空、宇宙空間。その死の領域との境界を定めるものは、二人が身につけたノーマルスーツしかない。

では、絡み合うジユドーとハマーン、二人の境界を定めるものは？

「ジユドー、私と来い」

「あなたの存在そのものがうっとおしんだよ！あなた独りで行けばいい」

幾度目かになるハマーンの誘い。それをジユドーは彼女の人格を全否定することで返した。

もしもこの時、女であるハマーン・カーンが倒れ、感情を露にしたのなら、結果は異なるものになっていたかもしれない。

だが、ネオ・ジオンの摂政としてのハマーン・カーンが彼女を奮い立たせた。

「どう言われようと、……己れの運命は自分で開くのが私だっ!!」

ジュードの腹に前蹴りを入れ、その反作用で愛機《キュベレイ》の元へ泳ぐ。

コクピットのリニア・シートに滑り込むや、機体が息を吹き返し、頭部デュアルアイ・センサーは不気味に光る。

「ジュード・アーシタっ! お前の命、もらった!」

出遅れたジュードもランドムーバー（ノーマルスーツ用バーニア）を使って、自身の《コアファイター》戦闘機に戻るが、

「動け、動けたら!!」

操縦桿を押し込むも、それはまったく反応しない。

そうしている間にも、《キュベレイ》が肉薄する。

ジュードは死を覚悟した。

その時!

《コアファイター》から発せられた謎の発光が迫る《キュベレイ》を押しとどめ、それどころか弾き飛ばした。

「なんだ、このパワーは、……ああっ!」

ジュードを守ろうと、ハマーンの否定を押し止めようとする力。《コアファイター》の中から多くの人の意志があふれ出てくるのを、ジュードだけでなくハマーンも感じてい

































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































































